

デカルトの感覚知覚批判

——その三つの側面——

松田克進

序

われわれは、日常の感覚知覚によって、物理的実在のありさまをただしく認識しているのだろうか。

デカルトは、この問題を考察し、そして一定の結論にたっした。では、その結論とはどのようなものか。

デカルトが感覚知覚を批判する論法は、けっして単純なものではない。というのも、かれは、感覚知覚をすくなくとも三つの種類に分類し、そのそれぞれにおうじて論法をつかいわけているからである。この意味で、かれの感覚知覚批判は、けっして一枚岩的 monolithic なものではない。

われわれの日常の感覚知覚のうち、デカルトが区別した三つの種類とは、てみじかにいえば、つぎのようなものである。

- 1 感覚的性質についての感覚知覚
- 2 空間的性質についての感覚知覚
- 3 生存条件についての感覚知覚

これらのそれぞれを批判するにあたり、デカルトは、どのような論法をつかったのだろうか。本論では、これを、順をおって検討する。

ただし、ここで、つぎのことに注意しておきたい。

デカルトの感覚知覚批判は、一枚岩的なものではない。このことこそ、本論があきらかにしようと思図していることである。しかし、かれが、その批判のぜんたいにわたって一貫してまもっている態度がある。それは、知性によって明晰・判明に理解することがらは真なる原理としてみとめ、そのうえで、つねにこれらの原理に立脚しつ

つ感覚知覚を批判する、という態度である。

したがって、われわれは、具体的な検討をはじめのまゝに、まず、つぎのような原理を確認しておくべきだろう。つまり、かれが、みずからの知性によって明晰・判明に理解し（あるいは理解したといい）、真とみとめた原理のうち、われわれの今後の議論にとって多少なりとも重要 relevant なものを。

それらの原理とは、つぎのようなものである。

- (P1) 「ころは思惟を本性とする実体であり、物体は、身体もふくめて、延長を本性とする実体であり、両者は実在的にことなる」
- (P2) 「物体に内在しうる性質は、形、大きさ、運動などの空間的性質のみである」
- (P3) 「形、大きさ、運動などの空間的性質は、色や味などの感覚印象 *sensuum perceptiones* に似たものではない」⁽⁴⁾
- (P4) 「ころは、身体とはことなる実体であるが、身体に健康に無関心ではいられず、それを保持するように駆りたてられる」⁽⁵⁾
- (P5) 「身体に感覚器官の微小部分の運動は、神経をとって、脳髄の一部分につながる。この部分の変化におうじて、ころは、色や味などのさまざまな感覚印象をいただく」
- (P6) 「『ころが感覚知覚する』とは、『ころが、色や味などの感覚印象をいただく』こととおなじではない。『ころが感覚知覚する』とは、『ころが、色や味などの感覚印象を契機として、知性によって判断をくだす』ことである」
- (P7) 「感覚印象については、真偽をかたることはできない。真偽は、判断についてのみかたりうる」

さらに、これらにくわえて、つぎのような規則をひとつ提示しておく。これは、デカルトが活用し、以下の議論にとっても、きわめて重要な規則である。

- (Rule) 「個物Sの性質をしめす判断『SはPである』は、『Sには、「P」という概念が意味するものが、内在している』という判断へと、分析することができる」⁽⁶⁾

I

本節では、感覚的性質についての感覚知覚にかんして、デカルトがどのような批判を展開したか、をしらべる。

ここでわたしが、「感覚的性質についての感覚知覚」としてかんがえているのは、つぎのような判断である。

- (a) 「この物体は赤い」
- (b) 「この物体は甘い」

(a)(b)は、(Rule)によって、それぞれ、つぎのように分析できる。

- (a') 「この物体には、『赤い』という概念が意味するものが、内在している」
- (b') 「この物体には、『甘い』という概念が意味するものが、内在している」

さて、問題は、「赤い」「甘い」という概念がなにを意味するか、である。

デカルトによると、われわれは、幼年期からの先入見のせいで、「赤い」「甘い」などの概念がなにを意味するか、について、ある特定の意味論をつくってしまっている。それは、「赤い」を代表として定式化すると、つぎのようなものである。

<日常的な意味論>

「『赤い』という概念が意味するものは、ある種の色の感覚印象に似たなにかである」

デカルトによると、このような意味論をとらなければならない積極的な理由はない。かれはいう。「わたしは、火に近づけば熱さを感じ、近よりすぎると苦痛をさえ感じる。しかし、火のなかにはその熱さに似たなにかがあると、さらにはその苦痛に似たなにかがあると、信じさせる根拠はまったくないのだ」(M; VII. 83)⁽⁴⁾。

そして、デカルトが批判を展開するのは、まさにこのような局面である。つまり、

かれは、〈日常的な意味論〉をとっているかぎり、(a')も(b')も必然的に偽となる、と主張する。かれの論拠は、実質上つぎのようなものである。

〈日常的な意味論〉にたつかぎり、「赤い」「甘い」などの概念が意味するものは、あくまでも、感覚印象に似たなにかである。ところが、(P3)によると、空間的性質は感覚印象に似たものではない。ゆえに、「赤い」「甘い」などの概念が意味するものは、空間的性質ではない。ところで、(P2)より、空間的性質でないものが物体に内在する、と主張する判断は、すべて偽である。そして、いま、(a')(b')は、まさにそのような主張をしている。ゆえに、(a')(b')は偽である。——このような議論である。

以上のような批判は、われわれが〈日常的な意味論〉をとっているかぎり、「赤い」や「甘い」などの概念の場合に限定されない。このような批判は、(a')(b')の形をしているすべての判断に、さらには——(Rule)により——(a)(b)の形をしているすべての判断に、論理的にひろげることができる。

感覚的性質の知覚にたいするデカルトの批判は、〈日常的な意味論〉にたいする挑戦である。そして、〈日常的な意味論〉は、感覚的性質について知覚するときの、われわれの常識的な思考体制の一部である。ゆえに、感覚的性質の知覚にたいするデカルトの批判は、われわれの常識的な思考体制にたいする挑戦である。その意味で、ラディカルである。

したがって、とうぜん、デカルトにとっては、感覚的性質の知覚の誤謬をふせぐということは、とりもなおさず、〈日常的な意味論〉を破棄することにほかならない。かれはいう。「対象に内在していると想定している色と、感覚のなかにあると経験している色とのあいだには、いかなる類似をみとめることもできない」(P ; VIII-1.34)。

しかし、旧い意味論を破壊するだけでは、いけない。そのかわりの新たな意味論を用意しないのならば、(a)(b)(a')(b')は、偽となることはまぬがれえても、真となることもできない。それらは、たんに、無意味な判断に墮するしかない。

デカルトは、もちろん、旧い意味論にかわる新しい意味論を用意している。われわれは、そのような新しい意味論を、二種類、みいだすことができる。

〈新しい意味論 1〉

『赤い』という概念が意味するのは、われわれに、ある種の色の感覚印象をうみだすところの、物体のうちにあるなんらかのものである」

<新しい意味論 2>

『赤い』という概念が意味するのは、われわれに、ある種の色の感覚印象をうみだすところの、物体の微小粒子の空間的特徴である」

これら二つの意味論は、けっして、本質的にことなるわけではない。<意味論 2>は、(P5)を考慮にいれつつ、<意味論 1>をより精密にいかえたもの、とみなすことができる。デカルトは、『省察』第 6 部や『哲学原理』第 1 部では、<意味論 1>をとり、『哲学原理』第 4 部では、<意味論 2>をとっているようである⁽⁶⁾。

注意すべきなのは、これらの新しい意味論が、両方とも、感覚的性質を空間的性質に帰着させている、ということである。したがって、空間的性質ではない感覚的性質というものを、デカルトは、すてたわけである。(そのような意味での感覚的性質は、デカルトにとっては、ない。)

そして、かれは、このようなおもいきった手段によって、(a)(b)のような形をした判断が真となる可能性をまもりえたのである。

II

本節では、空間的性質の感覚知覚についてのデカルトの批判をあきらかにする。

わたしが、空間的性質の知覚としてかんがえているのは、特定の物体をしめす概念に、形、大きさ、運動などの空間的性質を意味する概念を述語づける判断のことである。たとえば、つぎのような判断である。

(c) 「この物体は四角い」

これは、(Rule)によって、つぎのように分析できる。

(c') 「この物体には、『四角い』という概念が意味するものが、内在している」

さて、『四角い』という概念は、ある種の形を意味する。ゆえに、(c') が (P2) に抵触しないのは、自明である。

空間的性質を意味する概念が、空間的性質を意味することは、トリヴィアルに真である。したがって、空間的性質の知覚の場合は、概念の意味の内容しだいでは(P2)に抵触するのではないか、というような危険性は、最初からまったくない。これは、感覚的性質の知覚の場合との、おおきな相違点である。

しかし、(c')のような判断が(P2)に抵触しない、ということは、もちろん、そのような判断が真であることを、けっして意味しない。なるほど、「四角い」という概念が意味するものは、対象のなかに「すくなくともありうる」(P ; VIII-1.34)。が、それが、当の対象のなかに事実としてあるのか、ないのか、は、観察の精密さに依存することである。

そして、まさにこの局面で、デカルトは、空間的性質の知覚にたいする批判を展開する。それは、空間的性質についてのわれわれの判断は、かならずしも精密なものとはかぎらない、という批判である。なるほど、近接し、かつ粗大な物体については、われわれは、ほぼ正確な判断をくだすことはできるだろう。が、「感覚は、なにか微細なもの、きわめて遠くにあるものについては、ときとしてわれわれをあざむく」(M ; VII. 18) のである。

ここでわれわれは、前節でのデカルトの批判と、この節でのかれの批判が、まったくことなることに気づく。前節での批判は、「赤い」「甘い」などの概念の意味についてのわれわれの思考体制にむけられていた。それは、ラディカルなものだった。が、この節での批判は、たんに、判断の、いわば数量的な正確さにむけられているだけなのである。空間的性質の知覚にたいするデカルトの批判は、まったく常識的な枠をでない、とあってよい。

空間的性質の知覚にたいするデカルトの批判の、具体的な相をみておきたい。この批判ぜんたいのひな形として、対象の奥行知覚についてかれがいつていることを、とりあげよう。

デカルトによると、われわれは、空間的性質についての知覚を、われわれに生得的に与えられている能力をつかって、おこなう。奥行知覚の場合、デカルトはそのような能力を、『屈折光学』第6部でいくつもあげている (VI. 137-140)。そのなかの代表的なもののはつぎの二つである。

ひとつは、対象を単眼ないし両眼で見るときの、眼球の形の印象をもとに、対象の奥行を判断する、という能力である。対象をみるとき、眼球の形は、焦点が網膜にく

るように、対象の奥行におうじて眼筋で調節しなければならない。このときの調節ぐあいの印象によって、われわれは、瞬時のうちに、対象の奥行を知的に判断することができる、というのである。

さらにまた、われわれは、対象を両眼でみるとき、両眼を結ぶ線と二つの視軸とによってはさまれる二つの角の印象を手がかりとして、対象の奥行を判断することもできる。なぜならば、これら二つの角の大きさと、両眼のあいだの距離がわかれば、いわば三角法をもちいて、対象の奥行を計算することができるからである。このような生得的な幾何計算の能力を、デカルトは、「生得的幾何学 *géométrie naturelle*」とよんだ。

さて、奥行判断のこのような能力は、一定の範囲内ではじゅうぶん正確だが、それをこえると、不正確なものに墮する。なぜならば、感覚器官の感度には、生理学的な限界が存在するからである。

具体的にいえば、「眼球の形は、対象が眼球から4ないし5ピエ [1ピエ=約 32.4 cm] 以上はなれると、もはや感じられるほどには変化しないといってよく、対象がそれより近くても、変化は非常に小さいので、正確度の高い認識をそこからひきだすのは不可能」(D ; VI. 144)である。また、視軸のつくる角度も、「すこしでも遠くをながめるときは、ほとんど変化しない」(ibid.) のである。

以上、奥行知覚についてのデカルトの批判をみた。そして、他の空間的性質の知覚にたいするかれの批判も、原理的にはこれと同様のものである。

さて、これらの知覚の精密さを増進させる方法として、デカルトが提案していることは、なんであろうか。それは、これらの知覚にたいするかれの批判が常識的であったのと同様、やはり常識的である。つまり、すぐれた望遠鏡や顕微鏡を考案し、活用すること、である⁶⁾。

III

この節では、生存条件の感覚知覚についてのデカルトの批判をあきらかにする。「生存条件の知覚」とは、具体的には、つぎのような判断のことである。つまり、

- (1) 苦痛を感じることから、身体ないし身体部位の不調を判断すること
- (2) 飢えや渇きから、身体が飲食を必要とするかどうかを判断すること

(3) 物体がここに与える快や不快から、身体にたいするその物体の、有益性あるいは有害性を判断することなどである。

生存条件の知覚について、デカルトがしめている態度は、どんなものか。それは、一見すると、感覚的性質や空間的性質の知覚の場合とは、まったくことなる。つまり、懐疑的態度ではなく、楽天的態度である。かれはいう。これらの知覚は、「偽 *falsum* をしめすときよりも真 *verum* をしめすときのほうが、はるかにおいしい」(M; VII. 89) と。

ではなぜ、生存条件の知覚は、そんなにまで信頼することができるのだろうか。これについてのデカルトの返答は、つぎのような、神学的な議論である。

つまりこうである。(P4)より、「こころは、身体とはことなる実体であるが、身体に健康に無関心ではいられず、それを保持するように駆りたてられる」。しかし、身体に健康を保持するために、こころは、ぜひとも、身体に好調・不調や事物の有益・有害などのことから——つまり、生存条件——を正確に知る能力を、そなえていなければならない。そして、善なる神は、そのような能力を、人間にさずけたはずである。神の善性が疑うことのできないものである以上、生存条件についてのわれわれの知覚が不確定であるはずがない——という議論である⁶⁾。

さて、それでは、生存条件の知覚にたいするデカルトの態度のうちに、本質的に批判的な要素はみいだせないのだろうか。

おもいだそう。第I節でみたように、感覚的性質の知覚にたいする批判は、そこにあらわれる概念の意味に関係した。つまり、「赤い」「甘い」などの概念が、物体に内在しえないものを意味する、という点への批判であった。それでは、生存条件の知覚にあらわれる、「不調である」などの概念の場合はどうなのか。それらは、物体に内在しうるものを意味するだろうか。

デカルトは、「外的命名 *denominatio extrinseca*」ということばをつかう。外的命名とはなにか。ある対象Aの外的命名とは、Aに内在する属性をあらわす概念ではない。Aの外的命名とは、Aとは別のものBがAにたいして、どのような関係をもつか、どのような行為をするか、ということの意味する(そして、そういう間接的なしかたでAを規定する)概念のことである⁶⁾。したがって、とうぜん、ある概念が、「実際に事物のうちにみいだされるあるもの」を意味するとき、その概念は、外的命名では

ありえない (M ; VII. 84-85)。また、ある概念が外的命名であれば、それは、事物に内在するものを意味しない。

では、「不調である」という概念は、外的命名だろうか。

「不調である」という概念は、「思惟 *cogitatio* が、病人を健康な人間の観念に、できそこないの時計をただしくつくられた時計の観念に、比較 *comparare* する、ということに依存する」(M ; VII. 85) 概念である。つまり、この概念は、思惟(すなわち、こころ)が、ある比較操作をおこなったうえで、対象の状態を否定的に評価する、という行為を意味しているのである。そこでデカルトは、「不調である」という概念は、「それが適用される当の事物にとっては、外的命名である」(ibid.) とかんがえるのである。

同様に、生存条件の知覚にあらわれる、「飲食を必要とする」などの他に概念も、やはり外的命名であることがわかる。なぜならば、これらの概念も、こころが、身体の健康を保持したいという前提にたちつつ身体ないしその周囲の物体を肯定的ないし否定的に評価する、という行為を意味しているからである。

生存条件の知覚にあらわれる概念が、外的命名である、ということは、これらは、物体に内在するものを意味しえない、ということを含意する。そうすると、デカルトは、感覚的性質の知覚についておこなったのと同様の批判を、生存条件の知覚にたいしてもおこなうことができたはずである。つまり、デカルトは、つぎのようにいえたはずだ。「生存条件の知覚は、そこにあらわれる概念が、物体に内在しえないものを意味するかぎり、必然的に偽となる」と。

ところが、さきほどみたとおり、デカルトは、生存条件の知覚はたいてい「真である」、と明言している。これは、どういうことであろうか。

もし、「真理」という概念を、その通常の意味——判断と実在の一致という意味——で理解するならば、こまったことになる。そのとき、生存条件の知覚についてのデカルトのかんがえを整合的に理解することができなくなるからである。

そこで、われわれは、つぎのようにかんがえざるをえない。つまり、「生存条件についての知覚は(たいてい)真である」とデカルトがいうときの、「真理」概念は、通常の意味では、もちいられていないのではないかと。

われわれは、むしろ、これを、プラグマティックな「真理」概念とみなすべきではないだろうか。実際、そうみなすのが、テキスト解釈上もっとも自然である。という

のも、『省察』第6部の末尾で、デカルトが、生存条件の知覚について「真理」をかたるとき、かれはつねに、この「真理」概念を、「健康の保存に有益である」(VII. 89)「身体の保存に役だつ」(VII. 88)などの概念と交換可能な意味でもちいているからである。

つまり、デカルトにとって、生存条件についての知覚Sの真理性の条件は、つぎのようなものなのである。すなわち、「Sが真である」ということは、「Sは、対象となっている物体の概念に、そこに内在するものを意味する概念を述語づけている」ということではない。「Sが真である」とは、「知覚者は、Sを指針として行動してみよ。そうすれば、その行動は、知覚者の身体の健康を保持するのに役だつだろう」ということを意味するのである。

生存条件の知覚にたいするデカルトの態度は、一見したところは楽天的であった。しかし、上にみたように、かれの態度は、じっさいには、批判的な要素をふくんでいる。つまり、かれは、このような知覚については、その「真理」概念の意味を、従来のものからプラグマティックなものへと改変しているのである。

そして、「真理」概念の意味のこのような改変は、生存条件についての感覚知覚を、通常の意味での「真理」をさぐるための方法から、完全に除外することを含意する。この種の知覚は、「なにが真に事物のうちにあるかを、おしえてくれない」(P ; VIII-1.41) からである。

む す び

以上の内容を、てみじかに要約する。

デカルトは、われわれの、

- A 感覚的性質についての感覚知覚
- B 空間的性質についての感覚知覚
- C 生存条件についての感覚知覚

について、論法をつかひわけつつ、それぞれへの批判を展開する。この意味で、デカルトの感覚知覚批判は、一枚岩的ではない。

Aへの批判は、「赤い」「甘い」などの概念の意味についての、われわれの日常の信念にたいする批判である。「赤い」「甘い」などの概念が意味するものは、こころがい

ただ色や味などの感覚印象に似たなにかである、という立場をつらぬくかぎり、「これは赤い」というような判断は、すべて、必然的に偽となる。この誤謬を避けるためには、われわれは、「赤い」「甘い」などの概念の意味をある種の空間的性質にもとめるような、新たな意味論を採用しなければならない。

Bへの批判は、感覚知覚の数量的な精密さにかかわる。つまり、われわれの感覚器官の感度には限界があるため、Bの精密さにも限界がある、ということである。Aへの批判が、われわれの思考体制に予先をむけるラディカルな批判であったのとは対照的に、Bへの批判は、まったく常識的な内容である。

Cへの批判は、「真理」概念にかかわる。Cであられる概念、つまり、「不調である」などの概念、は、外的命名であり、ゆえに、物体それじたいのありかたをしめすものではない。したがって、「Cは真である」というときの、「真理」は、実在との一致を意味するのではない。Cの真理性は、こころが身体を健康を保持するためにとる行動の指針としての有効性を意味する。ゆえに、Cを、事物の真のありかたを探求する方法としてもちいることは、できない。

註

- (1) 「感覚印象」は、フランス語では“sentiments”である。苦痛、快感、飢え、渇き、色、音、味、匂い、熱さ、冷たさなどの感じのことである。これらは、あくまでもこころのなかの主観的な存在者にすぎず、空間的性質（＝物体の持ちうる性質）とはまったく異質なものだ、とデカルトはかんがえるのである。
- (2) この原理にもとづいて、デカルトは、こころと身体との組を、「心身合成体 *compositum*」あるいは「ある種の一体 *unum quid*」とよぶ。このことについては、つぎの拙論で検討した。「内感の特殊性に関するデカルトの見解」『関西哲学会紀要』第25冊（1990年度）所収。
- (3) この規則は、デカルトの存在論の結果である。つまりこうである。
デカルトは、存在するものを、つぎのような二つのカテゴリーにわけた。すなわち、独立に存在するもの（実体）、と、実体に内在するというかたちで実体に依存して存在するもの（様態）、である。さて、ものの性質は様態である。ゆえに、個物Sの性質をしめす判断「SはPである」では、「P」は様態を、「S」はPの実体をしめす。したがって、「P」の意味するものは、Sに内在する。
- (4) デカルトのテキストの引用は、つぎのものにもとづく。

ŒUVRES DE DESCARTES, publiés par Charles Adam et Paul Tannery,

L. Cerf. Paris, 1897-1913 ; réédition : Vrin, 1964-1974.

引用箇所は、巻をローマ数字で、ページをアラビア数字で、本文中の括弧内にそれぞれしめす。なお、“M”、“P”、“D”は、それぞれ、『省察』、『哲学原理』、『屈折光学』の略号とする。

- (5) このことを示唆するのは、つぎのような箇所である。

「……わたしは、これらさまざまな感覚印象がやってくる、もとの物体には、これらの印象におそらく似てはいないとしても、対応はしている、ある種の多様性が内在する、とただしく結論する」(M第6部；VII. 81)

「対象のなかに、なんであるかわからないものがある、と判断するだけならば、そのかぎり、われわれは、誤りに陥らないばかりか、むしろ誤りをふせぐことにもなる」(P第1部；VIII-1.34)

「[明るさ、色、匂いなどの感覚的]性質が、対象のうちでは、大きさや形と運動からなりたつ、ある種の配置 *dispositio* にほかならない、ということは、……これまでに証明されている」(P第4部；VIII-1.323)

- (6) ちなみに、『屈折光学』の真の主題は、すぐれた望遠鏡のつくり方である。
- (7) ただし、デカルトも、この種の知覚に誤謬が生じうることを、みとめている。かれがあげる例は、水腫病患者の場合である。水腫病患者は、水分をとると病状が悪化するにもかかわらず、渇きの感覚印象を契機として、水分をとることが必要だと判断してしまう。デカルトは、これは、病気によって身体機構が大幅に変化したことによって不可避免的に生じる例外的な事態である、とかがえる。「例外の場合にあざむくほうが、身体の状態が健康なときにつねにあざむくよりは、はるかによいことである」(M；VII. 89) から、このような例外の存在は、けっして神の善性に抵触しない、とかれはいう。
- (8) デカルトの論理思想を基礎としてアルノーとニコルが著した『ポール・ロワイヤル論理学』は、つぎのようにいう。

「様態については以下のことに注意してもよからう。様態には、実体に内在すると見なされるため、『内的様態』と呼びうるものがある。たとえば、丸い、や、四角い、である。他方、実体に内在しないなにかから採られているため、『外的様態』と呼びうるものもある。たとえば、愛されている、見られている、望まれている、である。これらは、他者の行為から採られた名前なのである。そしてこういうものは、スコラ哲学が『外的命名』と呼ぶものである」(Arnauld & Nicole, *La Logique ou l'art de penser*, I-2, Flammarion, 1970, p. 75)

(神戸女学院大学非常勤講師)

Trois arguments dans la critique de la sens-perception par Descartes

Katsunori MATSUDA

La critique de la sens-perception par Descartes, ce n'est pas du tout monolithique. Il prépare trois différents arguments pour trois différents types de perception : (a) la perception des qualités sensibles (par ex. rouge, doux), (b) celle des qualités spatiales (par ex. carré, triangulaire) et (c) celle des conditions vitales (par ex. indisposé, commode).

S'il s'agit de (a), le problème est l'idée sémantique que les idées comme «rouge» «doux» etc. signifient quelque chose de semblable aux sentiments de couleur, goût etc. Si un jugement (par ex. «Ce corps est rouge.») est fondé sur cette sémantique, il doit être faux. Pour éviter ce fausseté il faut adopter une autre sémantique, selon laquelle ces idées signifient des qualités spatiales.

La critique de (b) concerne l'exactitude quantitative de la perception. Conformément aux limites physiologiques des organes sensoriels (par ex. les yeux), doit être limitée l'exactitude quantitative de la perception des qualités spatiales (par ex. les distances).

La critique de (c) regarde le concept «vrai» appliqué à la perception. Les idées dans cette sorte de perception (par ex. «indisposé») ne sont que des dénominations extérieures et ainsi ne signifient aucune chose qui soit dans l'objet. Alors, si la perception est vraie, cela ne veut pas dire qu'elle corresponde à la réalité. Si elle est vraie, elle est utile. Dans ce cas, la vérité est l'utilité. Donc, on ne peut employer cette perception comme moyen pour rechercher la vérité.